

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第144号

多摩丘陵に残る  
義経の面影 - 11

## 寿福寺に残る鐙と大般若経 (その2)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

話は遡って平安中期の時代に平将門の乱を平定した  
俵藤太こと藤原秀郷の館が、武蔵国の国府(府中市)の  
近郊にあったといえます。この跡地に市川山見性寺(宗  
派不明)が建立されました。

その後、鎌倉幕府滅亡後の歴応年間(1338~1341)足  
利尊氏が、この寺を改め安国利生の祈願所として、龍門  
山高安護国禅寺を再建します。これは尊氏が全国(66ヶ  
国2島)に建立した安国寺の一つで武蔵国のそれが当寺  
高安寺であり、鎌倉建長寺末の臨済宗、開山は大徹心悟  
禅師です。その昔は大伽藍で塔頭10院、末寺も75院あり、  
寺領も広く東は代田村、西は貝坂、南は向山、北は山口  
に及んだといえます。戦国時代には疲弊したものの、慶  
長年間(1596~1615)に青梅の海禅寺第7世関州徳光禅師が曹洞宗寺院に改めて中興、江戸期には寺領  
15石の御朱印を受領していたといえます。



高安寺 山門



高安寺に残る弁慶の硯の井戸



高安寺の秀郷稲荷

さて、義経生存中の平安後期はまだ見性寺といい、義  
経主従はこの寺に何度も宿泊したと伝わっております。  
平家滅亡後に鎌倉入りを許されなかった源義経・弁慶等  
が、当地で赦免祈願のため大般若経を書写した地だとい  
い、谷保村の安楽寺が所蔵する大般若経も当寺が所  
有していたものだったと新編武蔵風土記稿に書かれて  
います。書写する際に弁慶が汲んだ『弁慶硯の井戸』や  
藤原秀郷の館があったことから『秀郷稲荷』など諸堂宇  
や観音堂を始めとして歴史を偲ばせる旧跡を残してい  
ます。

考察するに、寿福寺での書写は奥州へ逃げる途中に  
立ち寄り書写したと伝わり、見性寺の書写は腰越から京  
に帰る途中に書写と伝承されています。寿福寺での出  
来事と見性寺での出来事が良く似ていますよね。それ  
に寿福寺での伝承では奥州に逃げ延びる際に書かれた  
とされていますが、刺客まで放った頼朝のもとを、わざ  
わざと通って逃げ延びるのは史実とは考えられないと思  
います。

やはり書写するとすれば、腰越から京に帰る時かま  
たは鎌倉に住んだ3年間に立ち寄って書いたものか、ど  
ちらかだと思いますが、皆さんはどう思われますか？私  
は両寺が同じ鎌倉建長寺末の臨済宗であった頃の14世紀  
半ば、寺同士での交流も多くあり、相互乗り入れのよ  
うな間柄ではなかったか？ そのように思われるのです

が……。今となっては確証を捕まえることは難しく中世の歴史は正にロマンあふれる物語だと思  
いますが、皆さんのご感想は如何でしょうか？しかし、断片的にもこのような伝承が残っているとい  
うことは、嬉しいことだと思います。

(つづく)

鶴見川流域の中世  
その4

中世人の生活の舞台としての鶴見川 (4)

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橘樹研究会会員)

至徳元年(1384)7月某日、渋口郷は異常な緊張に包まれていた。多数の軍兵が剃髪の武士の下知に従い、城郭を構えて合戦の用意をしているのだ。若い剃髪の武士は江戸(蒲田)四郎入道道儀と名乗っている。

それは上野国の新田岩松直国に渋口郷を引き渡すために派遣された鎌倉府の役人が、渋口郷へ立ち入る事を阻止するためである。江戸蒲田氏の強硬な抵抗に遭って、鎌倉府の役人は渋口郷への立ち入りができず、新田岩松氏の代官に引き渡すことができなかった。

事件は武蔵守護代大石憲重によって鎌倉府に報告された。その報告書の写し(守護代大石憲重請文写)が正本文書に遺されている。

まず、新田岩松直国とはいかなる武士であろうか。直国は上野国新田庄(群馬県太田市・桐生市等)の新田氏の一族であるが、義貞とは別行動をとり足利方に与して活躍している。義貞が滅亡すると新田氏の惣領となり同庄を継承して、鎌倉府に出仕して本領を安堵され、新たに渋口郷等の所領を与えられた。加えて妻は鎌倉府の実力者上杉憲顕の娘であった。

つぎに、江戸蒲田氏をみることにしよう。守護代大石憲重請文写には江戸蔵人入道希全・同信濃入道貞・同四郎入道道儀の3人の名前が記されている。希全・道貞は兄弟、道儀は希全の子息とみられる。希全等は家を挙げて鎌倉府の命令を拒否したのである。

江戸蒲田氏は蒲田郷(東京都大田区蒲田)を本拠とする江戸氏の一族である。江戸氏は武蔵国を代表する有力武士であり、一族を各地に分出した。応永27年(1420)の「武蔵国江戸の惣領之流」という記録には、惣領の流れとして桜田・飯倉・石浜・牛浜・金杉など、庶子には原・蒲田と記しているの、蒲田氏は庶流であることがわかる。蒲田郷には江戸湾に面した深い入り江の蒲田浦という港があり、蒲田氏はここを掌握していたと思われる。

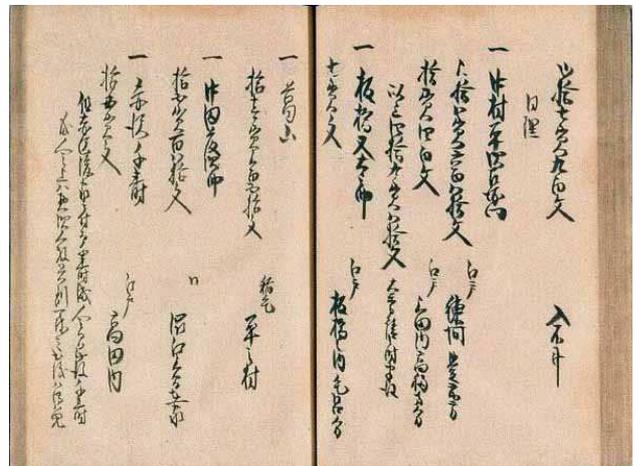
江戸氏と多摩川右岸との関わりは、南北朝期に入ると文献にあらわれる。文和4年(1355)江戸彌七が太田渋子郷(多摩区長尾・宮前区神木本町・神木・平・土橋)への押領狼藉を働いている(「佐々木文書」)。さらに『太平記』33巻には延文3年(1358)に江戸高良・同冬長は稲毛庄十二郷を領していた事が書かれている。こうした江戸氏一族の多摩川右岸への進出に呼応して、蒲田氏は交通の分岐点である渋口郷に進出して權益を得たのであろう。

渋口郷をめぐる新田岩松氏と蒲田氏の対立は、その後どうなったか史料がないので不明であるが、岩松氏も有力な武士であるだけに簡単に手放したとは思えない。

一方の蒲田氏も渋口郷に居座ったとみられる。この事件から50年後のことであるが、渋口郷の西隣にある醍醐寺領高田郷が武士によって押領される事件がおきた。醍醐寺は室町幕府に働きかけて、永享四年(1432)に高田郷を取り戻している。この時、現地に赴き醍醐寺に引き渡しに立ち会った鎌田助次郎は、高田郷に隣接する渋口郷の蒲田氏と思われる。

戦国時代に小田原北条氏が永禄2年(1559)に家臣の軍役を確定するために作った『小田原衆所領役帳』には、蒲田氏と渋口郷について大変に興味深い記事が載っている。江戸衆(江戸城に配置された軍団)の蒲田助五郎は六郷堤方で27貫文、稲毛庄木月郷今井屋ヶ八方で3貫文が所領として記されている。今井屋ヶ八方については井上弘明氏の研究によれば新城2丁目付近に比定される。それに従えば蒲田助五郎は渋口郷に近接して所領を持っていたことになる。さらに、太田康資(太田道灌の曾孫)は多くの所領を持ち北条氏から配属された寄子の外に、自分の私領の一部を寄子衆に配当している。この寄子として蒲田分の10貫文稲毛渋口分があるが、康資から蒲田氏の所領を安堵されたのであろう。これとは別に江戸衆の中田藤次郎には15貫180文 稲毛渋口三間在家の記事があり、渋口郷は二分割されて記されている。蒲田分は蒲田氏の所領が半ば地名化したもので、この蒲田氏は至徳元年に抵抗した蒲田道儀の子孫であろう。一方、岩松氏も渋口郷を支配し続けたと思われる。「中田藤次郎稲毛渋口三間在家」はその後身にあたると思われる。永徳4年の「地検目録」にある「領家方」と「二木方・立河方」等と下地中分された渋口郷を引き継いで、岩松氏と蒲田氏はそれぞれ支配したのであろう。

この他に蒲田氏のなかには世田谷吉良氏の家臣となった支族がいる。また、幸区円真寺には寛永17年(1640)銘の蒲田一族を供養した宝篋印塔がある。



小田原北条家所領役帳 国立国会図書館デジタルによる  
中田藤次郎 渋江(口)三間在家が記載されている

(つづく)

## 緊急寄稿

## 歴史の中に見られる感染症と人々

板倉 敏郎(元柿生中学校校長 元柿生郷土史料館相談役)

昨年、12月頃より中国武漢市から新型コロナウイルスによる感染症発症者が見られるようになり約4ヶ月近くで中国はもとより全世界的な規模に発展してしまいました。

特に、最近ではアメリカ・イタリアなど欧米諸国を中心に猛威を振るい、3月28日現在で世界中で死者約2万7500人を超す勢いを示しています。

史上最も大規模なインフルエンザは「スペインかぜ」です。1918年(大正7年)3月にアメリカで流行が始まり死者は5千万人と言われています。当時の世界人口約16億人の内すくなくとも5億人が感染したと言われています。同時代に行われていた第一次世界大戦の死者900万人と比較しても約5.5倍ですから、この「スペインかぜ」の威力がすさまじかったことがよく分かります。

日本では平安時代に「日本三代実録」(当時の3代の天皇の時代について書かれた歴史書)の中に貞観4年(862年)『咳逆(シハブキ=しわぶき)死者甚衆』と記載され「激しく咳き込み、多くの死者が出た」という意味でしょうか。これはインフルエンザの症状です。同時代に書かれたと思われる「増鏡」(当時の歴史物語)にも同様の記述がされています。悪いことにこの年のものは足掛け3年で貞観6年(864年)まで続きました。東京オリンピック、パラリンピックのことを考えると少し心配になります。また、平安時代後期の寛弘8年(1011年)一条天皇が『しはぶき』で亡くなったと「大鏡(この時代の歴史物語)」に記述されています。

平安時代の書物にはインフルエンザの流行と考えられる事柄が度々登場します。

この当時、神社や寺院では、真言宗・天台宗等の密教や陰陽道と結びつき、悪霊退散祈願のための加持・祈禱が盛んに行われていたようです。

右の写真は京都の八坂神社(祇園社)で疫病・災厄の除去を祈願して造られた「茅の輪」です。これは備後風土記に書かれている故事に倣った話と関係してきます。貧乏でありながらスサノオノミコトに善行を施してくれた蘇民将来(そみんしょうらい)という男に「世に疫病が流行すれば、蘇民将来の子孫であると伝え、茅の輪を付けていれば疫病から免れる」と約束したことに由来すると伝えられています。これが全国に広がり、多くの神社で「茅の輪くぐり」が行われるようになったそうです。

背景にこの時代には多くの伝染病(天然痘・インフルエンザ・麻疹など)の発生があり、病魔退散の祈禱や呪い(まじない)が各地で行われていたことが窺えます。

柿生付近の稗原小学校近くに「天王下」というバス停があります。これは「天王社」のあった名残だと思えます。たぶん傍らにある「八雲神社」がそれだと思われる、疫病除けの守護神を祀っていたのではないかと思われます。八坂神社とも関係がありそうです。

京都の八坂神社では例年、6月に茅の輪を設置するそうですが今年は、コロナウイルスの件があって、早めの3月に設置したそうです。千年以上も前から人々は数々の疫病に悩まされてきたことがよくわかる風習です。

江戸時代には分かっているだけでも18世紀に11回、19世紀に12回、中でも天保2年～3年にかけて発生した琉球風は海外との貿易のあった長崎・沖縄から上陸したものと思われ、ヨーロッパ・北アメリカ・インド・中国などにもほぼ同時期に広がっており、天然痘・ハシカも併せて感染していたようです。まさにパンデミックな全世界型のインフルエンザがいくつも流行したようです。

昭和15年頃に柳田国男が「水曜手帳」という著作の中に指摘していた王禅寺で見かけた子供の手形が押された脇に「コノ手ノ子ハルス」と書かれた紙の「まじない札」もインフルエンザに関するものだったかもしれません。

この新型ウイルス大感染は「現代民主主義を試すもの」でもあります。個人の権利を大切にするのか、全体の福利を大切にするのか、またそのバランスをどう考えるのか現代人に投げかけられた重要な課題となっているのではないのでしょうか。



八坂神社に設けられた茅の輪くぐり  
(朝日デジタル記事より転載)

シリーズ  
教育の歩み 第2部

## 学級の誕生(13)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆私設学校の抵抗と消滅◆

この措置で、私設学校の殆どが廃校に追い込まれました。その結果、ロンドンだけで4万4千人もの子どもたちが、公的に認められた学校に就学していない未就学児とされました。ロンドン市は、この子どもたちを収容する学校の設置を迫られたのです。右往左往するうちに、一度は廃校とされた私設学校が再び増加しはじめたのです。労働者は、子どもたちの学校を守ろうとしたのです。これには当局も慌てました。その結果、次なる強硬措置として、1876年の教育法が制定されたのです。

76年教育法は、未就学児の就労禁止を明記していました。10歳以上の子どもの就労には、就学証明の提出と確認が義務付けられたのです。就学証明は、学務委員会が公認した学校を卒業した子どもたちにしか発行されません。就学証明のない子どもたちの雇用は禁じられているのですから、この法は、事実上就学強制の意味を持ったのです。

さらに1880年には、地方当局に5歳から10歳までの子どもたちを対象とした、義務就学条例を定めるよう強い要請が出されたのです。義務教育制度は、まさに最底辺の労働者たちのための、私設学校潰しを狙いとして制定されたのです。

このような過程を経て、学年制と学級制を組み込んだ形で、イギリスに誕生した義務教育制度は、普及していったのですが、組織化された規律の厳しい学校に対する抵抗は、その後も続きました。義務教育制度が軌道に乗り、学級制が定着すると、抵抗は「学級」秩序への反抗となって現れました。イギリス教育史の大家ハンフリーズが、1890年代と1900年代に就学した人々への聞き取り調査をまとめた『大英帝国の子どもたち:聞き取りによる非行と抵抗の社会史』は、学級秩序の維持を最優先とする教師とそれに抵抗する生徒や親との対立を見事に捉えています。

ハンフリーズは書きます。「学校教育への底辺労働者の子どもたちの反抗は、教室の中でも執拗に行われた。教室内に閉じ込められて、もっぱら機械的な暗記と堅苦しい規律を強いられ、実生活とかけ離れた無意味な礼儀や道徳を押し付けられたために、教室内には常に反感が渦巻いていた。生徒の抵抗は、不服従、規律違反、消極的で投げやりな授業態度となって現れた。多くの生徒が非協力で、時には露骨に敵対的な態度をとることもあった。そこに大人数の学級、不十分な施設、訓練不測の教師といった悪条件が重なると、教室がうまく機能するはずがなかった」と。

教師側からすると、このような学級の状態を放置しては、学年末の試験の結果に響くことが確実です。合格者が少なければ、自らの教育的力量が問われる上に、国庫補助金が減らされますから給与の減額にも繋がります。そのため教師は、必死になって学級秩序の維持を図ろうとしました。授業内容で生徒を惹きつけられない教師のすることは、体罰しかありません。それは親たちをも巻き込んだ猛烈な抗議を招きました。ここに親をも巻き込んだ学校ストライキが頻発するようになったのです。

こうした抵抗がようやく抑え込まれ、小学校教育がイギリス全土に定着するのは、1930年代も後半のことでした。現代の学校には、全体としてこのような問題はありません。しかし、不登校が頻発し、いじめ問題が深刻化し、学級崩壊(小学校)や授業崩壊(中学校・高等学校)が日常化している現実を考える上で、イギリスで進行した義務教育制度の定着過程、私設学校と組織化された学校との軋轢を巡る問題は、どこか示唆に富むように思われます。2018(平成30)年度の川崎市における小学校の不登校児童数は529名、中学校の不登校生徒数は1338名(生徒全体の4.7%)に達しているのです。 第2部完

## 柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**5月** 17・24・31日(毎日曜日) **6月** 13・20・27日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (5月3・10日、6月6日は休館です)

## 第18回 特別企画展

## 続 戦中・戦後の教科書展

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つけた戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

期間 5月17日(日) ～ 8月29日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室